

尾崎喜八資料

第 2 号

Contents

追分哀歌／尾崎喜八	2
思い出の中の尾崎喜八	
『旅と滞在』の頃—尾崎さんの手紙一／山崎榮治	3
研究と資料	
初期の山行きとその周辺についての雑誌掲載隨筆	7
山に行くまで／「詩文学」昭和五年八月号	
高山植物写真図集 武田博士の仕事と人と／「霧の旅」	
秋の山地と懐しい人々／「雄弁」昭和九年十二月号	
旅に生きる／「文学案内」昭和十一年十二月号	
*	
尾崎喜八 錄音記録(放送番組)／堀 隆雄	14
新聞・雑誌掲載目録(二)、大正十三年～昭和六年	15
同・附記／嘉納忠明	
この一年の出来事／詩碑・文学碑の案内／その他	20
*	
表紙題字／草野心平	

尾崎喜八研究会
昭和61年2月

追分哀歌

(遂に私にはよそびとであつた、かの「わすれぐさ」
の詩人にさゝぐ。)

火山砂に書いては消す者よ

からまつの降りつむ秋に立つ者よ

おんみはすべての空しくなるたまゆらを
くづれるきはをそんなにも愛した

白壁ぬらす夕立の

かはくさだめをいとほしむやうに

はない合歎の一日が

かたみもなくて逝くことに

生きるのもつとも美しい姿を見るやうに

またあたらしく来る秋に

夏を亡びる夕菅をわすれぐさと云つた

そのやうに遠くほのかに歌はれるために
この高原はけふも雲の薄氷うすひやをならべるのか

しかし時はすでに晩い

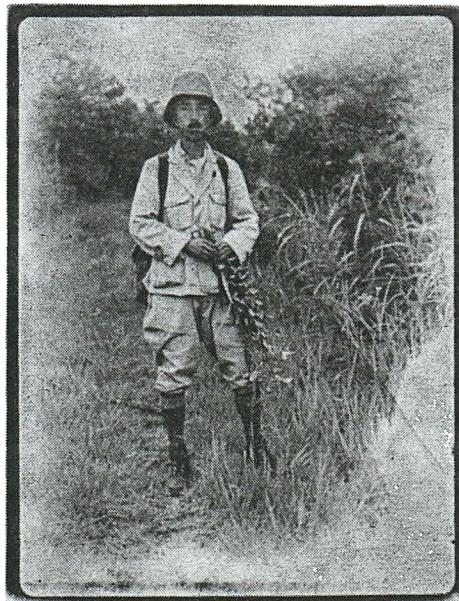
われらと共にとどまれと

あの清い一人の痩せた手をとるすべもなく

古い駅路のわかされに

家々は骨のやうに白く貧しく枯れてゐる

(「四季」昭和十四年九月号)



尾崎喜八「8/3 自画像(花ヲ持テル)」
同じ箱に保存されていた他の植物の写真の乾板との関係から見
て、昭和八年八月、信濃追分にて撮影された可能性が極めて強い。

『旅と滞在』の頃

——尾崎さんの手紙——

山 崎 榮 治

た記憶力の衰えに阻まれてか、一向に筆が捲らず、遲滞に遅滞を重ねて、これはいよいよ約束の履行を断念するほかはないという事態にまで立ちいたつた。私が尾崎さんの書簡に援けを求めるところを思つたのは、実はこうした窮地に立たされたことなのである。

今回のもののなかには、名宛の人間に對する懇篤に過ぎる言葉があちこちに見出される。それをその名宛の当人がみずから人に示すということには首をかしげる向きもあるだろう。だが今はそれを顧慮する余裕が私にはない。

(かりに番号を付した各通の冒頭に郵便局の消印の数字をしるのは、それによつて年次を示すためである。尾崎さんの名と私の名は各通を通じて全く同一なので省略した。尾崎さん自身の所書きは市外杉並区荻窪一ノ百二十八で、これは終始変わっていない。)

* * *

(一) 消印(不明)

いよいよ冬らしい毎日を見る事になりました。朝々の稍にからまる日光の流れが清らかに平和です。あなたも新装の建物の中で、いくらか楽しい瞑想の時を持つ事が出来るやうになつたでせう。

同封で霧の旅会大会の入場券を御送りします。僕の話は兎も角、木暮さんの講演と、塚本君の十六ミリとは、確かに立派なものです。是非御都合して御出かけの程を願ひます。家でも皆行きます。

時刻は夕刻から、場所は市電水道橋交叉点角、学校の鉄門を入つて守衛小屋で訊けばすぐ分ります。右取いそぎ

十一月十七日

これは封書なのだが、封筒の切手のところがちぎり取られていて、消印のあとも見つからない。しかし昭和八年のものであることは、この次の速達のはがきと同じ日付であることから明らかである。

「新装の建物」云々は、当時私の勤めていた東京中央郵便局が、それまで大手町にあった木造の仮りの局舎から、現在も東京駅前にある白い五階建ての、当時は形の美しさが目立った新局舎に移つたこ

とをいうものである。そこには尾崎さんの二十歳代からの友人今井

武夫さんも勤めていたので、中央郵便局まで外国への手紙を出してくれる尾崎さんは、よく窓口の局員にたのんで今井さんや私を呼び出したものだった。もつとも呼び出されても、ほんのしばらく立ち話ができるだけで、郵便局の勤務では「ちょっとそこらでコーヒーでも」というわけにはいかなかった。窓口には、京橋か日本橋生まれの、色白で小柄の、ひどく愛想のいい局員が一人いて、尾崎さんはいつもそのお気に入りの局員にたのんでいた。

「霧の旅」会については尾崎さんの記述を借りると、「木暮理太郎とか武田久吉とかいうような尊敬すべき大先輩が、その名譽会員になつて、『親しみ深い会』で、尾崎さんはそこに山の直接の先輩河田楨さんに紹介されて入つたのだった。この講演会には行かなかつた。どんな事情で行けなかつたのかはもう憶えていない。

(二) 消印(荻窪 8・11・17)

停車場から五六分のところで、割に広くて、家賃も御希望程度の家があつたと云つて、今、頼んで置いた友人から使が来ました。何でも八畳・六畳・四畳半のやうな話でした。それで兎に角明土曜日御見分に御出かけ下さるやう御願ひします。明日は終日在宅してゐますから、役所の御退けの後来て下されば散歩旁々一緒に見に行く事が出来ます。右取敢ず御案内申上げます。(うちではもう大喜びです) 十一月十七日

これは速達のはがきで、前便のあとを追つて投函されたものようである。

当時私は父とふたりで、その頃の市外渋谷区代々木富ヶ谷に住んでいたが、できれば尾崎さんのいる荻窪に移りたいと思つて、適当な貸家がもしあつたらということを尾崎さんに話したことがいわゆるのである。

土曜日の貸家見分に行つたのかどうかは定かでないが、荻窪に貸家を一軒見に行つたという記憶はある。

(三) 消印(大崎 8・11・21)

愛する友よ!

「霧の旅」の講演会での僕の話は、其朝からの風邪の発熱を推して出席したくために、草案の半ばにも及ばない短かいものでした。それでも午前十一時から午後の九時半まで会の為に働いて、とにかく自分のドゥヴォアルを果し得た事は満足です。

君の御手紙を昨日頂いて、いくらく落胆しながら、しかし早速出かけて、大家と赤松君のところへ断りに行きました。それはもう済みましたから御介意無いやうに願ひます。

時があなたの為に未だ熟しないならば、それがおのづから熟す本当の秋を静かにお待ちなさい。さうして、寒い暗い雨の夜の横はる窓の内部で、寂しいリトムの音を屋根に聴きながら、今のあなたのが喜び無き心を「色づいた捲髪の秋の思想」で、「純潔な、輝く青の、金色の明るい天空や、銀色をした早朝の霧や、青い杏や葡萄の房や、秋の色になつた森などへの思想」で慰めたまへ。しかも僕があなたに就て安んじてゐられる事は、あなたがその隠忍の硬い樹皮の外に、酸の多い生の果皮の上に、悩む者の兎もすれば忽がせにしがちな徐ろに来る成熟の風を、静かに促しの金色の光を、決して愚かしい憤りで斥けないばかりか、その待望の中からさへ一つの遙かなる憧れの歌を創る優しい力を持つてゐる事です。そして僕があなたを常に愛し尊ぶ事の出来るのも、あなたのそのザンクトな、ソアルトな心情によるのですがこの考へはいつも変りません。

又来て下さい。僕は二十三日には成田(又講演!)に行きますが、其後は常に家にゐます。家族はすべてあなたを喜んで迎へます。

これは封書である。
十一月二十一日

私の手紙というのは、「霧の旅」会の講演会に行けなかつたことの言い訳と、逼迫した経済上の理由で荻窪への移転が不可能になりました。尾崎さんに無駄な骨折りをかけたことについての詫びを述べたもので、そこには泣き言めいたことも書き添えてあつたのだろう。ドイツ語を振りがなのように付けた引用文の終わりには1の印が

あって、上の余白に 1. Hermann Hesse と註してある。

尾崎さんはたしかこの二、三年前からドイツ語の学習をはじめたはずである。それはヘッセを原語で読みたいためでもあった。そしてこの手紙の六年後には、『ヴァンデルング』の翻訳を出している。

ヘッセの詩句の訳に一々ドイツ語の発音がルビのよう付けてあることは、老成の人を頬笑ませるかもしれない。しかし中学で習った英語のほかにもう一つの外国語、たとえばドイツ語を習いはじめた人には、その発音そのものが一種の言い知れぬ魅惑を伴つて聴こえるものである。それはドイツ語に練達してしまった人にも、そしてまたドイツ人にも、かえつて感じられないだろうところのもので、初学者の耳だけが聞き取る一種のボエジーである。秋。^{ヘルプス}トには、日本語のアキにも英語のオータムにもフランス語のオートンヌにもない夢のようなものがあるようには思われる。それは目新しいものの持つ魅力であり、やがては消える幻影のようなものかもしれない。しかしそれだけのものと言い切ることもできない。なぜなら、アキでもオータムでもオートンヌでも、それぞれがその言語で書かれた美しい詩句のなかに現れるとき、その同じ夢のようなもの、同じ魅力、同じ幻影はふたたびそこに甦えるからである。そして詩人は詩を読むためにこそあらたに外国語を学ぶのだから、彼はある言葉のひびきの新鮮さからくる夢と、そのひびきが美しい詩句のなかで獲得する夢との、双方を同時に享受することになる。これは些細なことではない、そこにはボエジーの秘密がひそんでいるとさえ言えるだろう。

(四) (封筒なし)

『しかして丘の彼方に沈める太陽は、限りなく美しき色をもて軽羅なす雲をいろいろ、二頭づゝ繫がれたる馬にまたがる農夫の群、手に手に刺針^{さば}を上げ持ちつゝ、おもむるに夕餉の道を帰り来ぬ。かくて茫茫とひろがる夜は、遠き沼沢のほとりをぞ、先づ鳶色に染めはじめる。』

*

フレデリック・ミストラル
「ミレイオ」第一歌

早速の御返事ありがたく拝誦、包紙を「ナルチッス」のやうにして、表紙をクロースにするといふ御考案は結構のやうに思はれます。何卒よろしく御ねがひ申します。

当分大抵在宅。土、日曜日などには御待ちしてゐます。

三月二十八日

これは「八ヶ嶽夕陽」という題のある、「く淡い彩色の鉛筆画の絵はがき（但し郵便はがきにはなつていない）の裏に、美しい小さな字で書かれているもので、封筒に入っていたものか、それとも何かに挟んであつたものか、もはや記憶がない。しかし文面と日付から考へると、散文集『山の絵本』の出版（昭和十年七月）を間近にして書かれたものと思われる。『山の絵本』のカヴァーについては相談を受けたことがあり、それに使うための絵を描いて提出したことがあつたが、採用にはならなかつた。

プロヴァンスの詩人ミストラルのことはその頃よく話題にのぼつた。私もプロヴァンス生まれのフランス人にプロヴァンス語の発音を訊いて、その二、三篇をひと頃は暗記していた。

(五) 消印(杉並10・7・23)

親しい友よ！

代々木の夕暮の事を書いた美しい御手紙を、さつき、すつかり喜ばながら読みました。僕は全く君に同感です。このごろの異常に美しい空や、雲や、日光や、草木のあります、到底筆にも、口にも表現出来ないやうな、深く、豊かに、水々しいものです。僕もちやうど近所の畠への散歩をして來たところでした。南の風が涼しく野づらを渡つてゐました。空には一つ二つ鱗をならべたやうな巻積雲の薄片が浮いてゐる暗い帶のやうな雲の方へと落ちるところでした。畠ではタウモロコシの葉がサラサラ鳴つてゐました。椋鳥の群が、豊かな量のある声で、「ギヨツギヨツ」と云ひながら、畠から畠へ移つてゐました。槿の薄紫の花が畠のくろに咲き、夕日が花々しく野の西方に傾き、そして椋鳥がいち早く野に散る頃になると、もう本当に夏です。そして今がそれです。夜はまた星が涼しいでせう。

僕は今、「山の絵本」の出来るのを待ちながら、ジョフリーズやハドソンのやうな英國人のものを主として読んでゐます。今日ハドソンの“Birds & man”の中で“Birds at their best”といふ一節を読んでゐた心、上に描いた可愛い鳥の話が出てゐて、それが僕をひどく悦ばせたから御知らせします。

「一月の或るすばらしく晴れた、風の強い寒い日に、鳥学者ハドソンはアヴァン河畔を歩いてゐました。川は其處では幅が狭くなつて、対岸の崖は一面の樺(?)の藪でした。その上は丘陵で、ブナの樹が冠のやうになつて続いてゐます。その河岸の寂しい二月の風景が余り美しいので彼がぢつと佇んでゐると、岸の柳の藪を向うの方から伝はつて、十二羽ばかりの島柄長(しまあじなが)が段々近付いて来ます。それがとうとうハドソンのある処から最も近い、風除けのやうになつて、川の真中まで茂つてゐる樺の樹叢までやつて来て、小枝にとまつたり、水の上へ突出した枝へ逆さにぶらさがつたりして遊び初めました。樺の樹には無数の海老茶色の菜黄花(菜花) (俗にネコと云ひますが、ハンノキ類の紐のやうな花です) が垂れてゐます。そのマロン色の房と、灰色と薔薇色とで身を飾つた小鳥の群と、あたりの二月の太陽と水と青空との効果が、全く童話のやうな、又実に幻想的な絵であつて、彼は今でもその光景を忘れる事が出来ないと云つてゐます。其他まだ沢山面白い話がありますが、それは又の事として。

さて御待兼の「山の絵本」は、遅くも後一週間位で出ます。出たら早速御届けします。表紙カバーの校正さへ出ればもう一切済むのです。

今夜は実子と栄子とが目黒の祖母のところへ出かけたので留守番です。女中は裁縫、僕は御存知の下の座敷でこれを書いてゐます。もうそろそろ気象通報を筆記する時間ですから之で擲筆。ヘンテコな文章の手紙になつてしまひましたが、美しい御手紙の心ばかりの御返事だと思つて御許し下さい。

七月二十二日 夜九時半

半分を六行分ほどあけたところに、何かの柄のよう見える長い尾をした小鳥の絵が、墨とベラ色の二色で丹念に描かれていて、絵の上に「long-tailed tit 島柄長」と説明が付いています。

ハドソンは「いえば、尾崎さんはこの手紙の年から十四年後

に、信州富士見のあの流寓の地でも、東京の本屋から届いた「1冊の新しいハドソンのために悦ばされ」で、「ハドソン的な冬の一日」という十数ページの長い散文を書いてゐる。

『山の絵本』がいよいよ出版されたときには、上野の精養軒でかなり盛大な出版会が催され、私も出席した。会がはじまる前にロビーようなところで、尾崎さんが私を高村光太郎に紹介してくれた。もつとも、それは同席の場合になされるあの習慣的なものにすぎなかつたから、紹介とよべるほどのものではなかつた。山の作家、深田久彌も来ていた。席上では全部の出席者がスピーチをさせられたのであらうか、私も何かしゃべつた。

(付記。表題にもかかわらず、これらの書簡は『旅と滞在』よりもむしろ『山の絵本』当時のものであること、ご覧のとおりである)



初期の山行き、および その周辺についての 未刊行隨筆

山へ行くまで

僕は山が好きで山へはよく出かけるが、所謂ホツホゲビルグを云々する登山家といふ者からは遠い。登山家のカリテは、すでに今日では、専門家の仕事とは云はないまでも一つの特別な技能を予想させる域にまで達している。そこでエネルギーの大半を精神的なトラブルへ与へてゐる者にとつて、かなりの体力と、多くの細かな智識と技術と、其上纏まつた時間とを必要条件とする——態度として研究的な境まで進んでゐる——高山専門の登攀は、概して適當では無いばかりか、実際から見ても吾々の仕事とは並行しない事のやうに僕には思はれる。

さうかと云つて、近年歳を逐つて増えてゆく山嶽の研究書や登山記録や案内記を下の方で読んでゐて、それですつかり堪能してしまふ事は、未だ自分のうちで大いに動いてゐる若さの力や智識慾が承知しない。そこで僕も山に関係のある書物は好きで読んでゐる。文学生的見ても価値あるものが少くない。元来、とは云へ、一步を踏み出すことは新らしい

山といふ一つの自然が対象なのだから、或る時代に単に素朴な驚異の感情で書かれた紀行文が——とはいへ此の原始の感情の失はれる事を僕は望まない——だんだん経験を重ね智識を豊富にして行つた結果それが科学的研究的にもなれば、文学の一ジャンルを形作るやうになつた事は当然な進歩に違ひない。それに文章を書く能力のレベルが一般に高くなつてゐる今日では、山嶽登攀の記録にもすぐれ了學問的価値と芸術的魅力とを兼ね備へたものもある。これは一面大戦以来ヨーロッパに勃興した旅行文學とも通ふところのあるもので、居ながらにして世界の新らしい視野と読書の楽しみを得られるのだが又一方には、特に日本では人々の傾向として、(これは何も山に限つたわけではない) 実地の経験無しの安価な耳学間に終つてしまふ弊もあるのである。

或人が或時僕に云つた、「これからは渓谷だね。渓谷は何と云つても黒部だね。君」 ところで此の好人物は、実は山はおろか、一般的の自然そのものに対しても余り感じを持たない人なのである。

僕は登山を散歩の延長のやうに思つて実行

してゐる。ヘンリー・トロオは『徒步』といふ有名な文章を書いた。(尤もトロオの一生そのものが素晴らしい徒步だつたとも云へる) 僕の登山は其の徒步が爪先を上げて、時に二千米突から三千米突級の山嶽へまで延長する過ぎない。

世界へ一歩を踏みこむことだから、まるつきり何の予備知識も準備も持たないで、でたらめに、行き当りばつたり、どうにかなるだらう位では出かけない。物を知る上で損をする事は厭だ出来れば地質学も鉱物学も一通りは知つて置きたい。其の地方の人文地理学や伝説なども頭に入れて置きたい。理想と云へば云へない事もないが、これは旅の経験から受けた実感である。衣は肝にいたり袖腕にいたるといふ程度の古風な英雄主義や横車は、今日では余り通用しないばかりか往々非常な損害の因になる事さへある。

やつぱり色んな人の実験から割り出されたぎりぎり決着の準備と、各人各様の用意とは、登山には特に必要なことだと僕は思ふ。金と時間とに余裕があれば、元来好きだから季節を問はず山へ出かける。尤も季節によつて対象とする山が違ふ事は云ふまでもない。真夏の草いきれと烈日とにぐらぐらしながら、千米突級の草山を搔き登る者もあるまい。兎に角日本は山に恵まれた国で、わかつても本土の中央部はあらゆる山相に豊富だから、四季を通じて登る目的物に事を欠かない。勤めを持つ身では無いので此頃のやうな登山季にも網棚残らずリニクサツクと云ふやうな土曜日曜の汽車で蒸し上げられる心配もない。僕は出かける。如何にも山へ出かけますといふやうに、御大層らしく出かけない。根本原理は必需品で、いつ何時でも出発出来るやうに準備してあるから、只其奴を点検し直せばいい。此の再点検は案外ゆるがせにしてはならぬ事である。幾らかの食糧と、手元に

ない地図とを買ひに行く時の気持には、さすがに子供の頃の遠足の前夜を想はせる一種清新な楽しさがある。新らしい地図には五百米突の等高線^{コントゥーライン}毎に色鉛筆で色をつける斯うして置くと地勢の概念が楽に呑み込めるからである。参考書も出来るだけ読んで、肝腎なところは手帳へ控へたり地図へ書き込んだりする。此の手帳といふ物を持つて行かない人も無いだらうが、山の旅では此れに必ず各地点の発着時間を書いて置く事が必要である。地図の上で計つた好い加減な里程よりも、山では実際の所要時間を書きつけて置く方が色々の点で利益がある。それから一々の費用も書きつけて置く。これも亦案外役に立つ事である。僕は不精となほざりとて近頃まで旅の費用を書きとめてゐなかつたが、高村光太郎君の遣方を見習つて今では中々利益を得てゐる。リュクサックの中へ何でも一緒にたに詰め込まずに、薬は薬、紙は紙、蠟燭やマッチは蠟燭マツチといふ風に、それべく別々の小さな袋を幾つも作つて、其等を整然とリュクサックの中へ納めて置く事も登山者の常識である。

僕は唯一の贅沢としてクレツスマンの安葡萄酒を一本リュクサックの底へ横へる事もあるが、ポツサビリチが許さない時には潔く断念する。実際、峠の秋風に吹かれて、十月も山々の波濤や遠い平野のひろがりや、湧いては消える白雪を眺めながら咽喉へ流し込む白葡萄一杯の味は、下の方にゐては到底想像も出来ないものである。ふだんは山で米の煮炊をしない自分の習慣だから、飯盒は持つて

行かない。尤もこれも山による。米味噌を欠かす事の出来ない山もある。普通は僕としては二三本のコップとソオセージとを持つて行く。氷砂糖携帯も常識の一つだ。ココアに砂糖も僕は欠かさない。これは贅沢ではなくて、僕には命の親だつた例がある。山に弱い人は是非これを持つて行くといふ、疲労は忽ち恢復する、尤もぢきにこんな物を飲みたがる人もあるが、景色が佳いからとか、少し疲れたらとか云つて、其のたんびに一々ココアや珈琲を沸かしてゐた日には山は歩けない。やつぱり幾分の苦痛はこらへ、不自由を忍ぶところに登山の味があり、又其の無形の利益もあるのである。

人間の足といふやつは豪いもので、どうしてあんな天涯の高みへ行き着けるだらうと思つて遙かに見上げる山稜のスカイラインへ、地道に歩いて行けば結局は戴つかつてゐる事になる。下の方で為す事もなく油を売つてゐるだけの時間に、山の中で人は二千米突を優に登る。二千米突と云へば、関東地方では潤葉樹が針葉樹にかかる高さである。東京から見る山ならば相州の丹沢山塊、秩父の雲取、白岩甲州大菩薩の本嶽や小金沢の最高点である。もっと北へ行けば二千米突はもう高山植物地帯である。兎に角足が元手だから無理な歩き方はしない。足の裏は一步一步びつたり地面へ着くやうに歩く。パアティーの登山の場合には、一行の中で最も体力の劣つた者を規準にする。そして皆が離ればなれにならなければ歩調を合せて一緒に歩く。心臓の丈夫な

足の速い者が、よく自分だけどんどんと先の方へ行つてしまつて、後から息を切つて登つて行く者を休みながら(時に睥睨して)待つてゐる事がある。斯ういふのは最もいけない。山では抜駆けや手前勝手や隠密な思想などは絶対に禁物である。普段氣の合はない者同志とか、互に何か含むところのある敵同志とかは、登山のパアティーの構成上避けられなければならない。しかし又友達の眞の姿に触れるのも實に旅の時、登山の時である。僕はさういふ貴重な経験を幾つか持つてゐる。

東京の西郊、畑の中や草原へ立つと、今は夏の金剛石色の昼間の靄にかくされはるが、そのきらめくヴエイルの奥に、南北から北東へかけて、山々は現実にそば立つてゐるのだ。あゝ、上信武甲信飛越。夏の千山万嶽が、すでに水晶を溶く天上の秋風の下で訪るべき人を待つてゐる。夜あけの山ふところに筒鳥は啼き、キヤンブの炊中に懸巣を聴く。君の足が未だ岩が根を踏むに適してゐるうちに、君の胸が未だ高山の荒い空気に堪えられるうちに、友よ、リュクサックを背に都の塵勞から旅立たないか！

〔詩文学（昭和5年8月号）詩文学社

高山植物写真図聚

武田博士の仕事と人と

多分普段でも容易に趺坐をかく事はあるまいと思はれる武田博士が、畠の上にきちんと畏まつて、皮膚に早くも小皺の見える日に焼けた額筋をして、金縁の眼鏡を少し額の上へ

押し上げて植物の乾燥標本や写真の印画を仔細に検査してある処を僕は幾度か観察した事がある。

さういふ時の武田博士の指先には、物を「持つ」とか「つまむ」とか云ふよりも、寧ろ一平方センチメートルの指の腹で「玩味し、愛撫する」と云つた方が一層当つてゐるとは思はれる微妙な働きがある。取り上げたそれぞの物の質と、量と、目方に、極めてデリケイトに適応する指や掌の触れ方である。しかも其処には何等特別な関心とか心遣ひとか云ふものではなくて、ちやうど共鳴、共振、同感などの働きと同じやうに、ごく自然な、当り前な、まるで一ひらの軽い雲に夕日の色が映る虚心のやうに虚心な融合が感じられるのである。

独乙の（正しくはチエコ・スロバキアの）詩人ライネル・マリア・リルケが、或時仏蘭西の詩人ボオル・ヴァアレリイを訪問した。其時リルケは、独乙語には手の平と手の甲（一）とか云ふ言葉はあるが、ちやうど掌にあたる言葉が無いと云つて嘆いたといふ話がある。僕はそれを読んで如何にもリルケらしいと思つた。実際彼くらゐ「物」の真相と、真相の不可思議とに、肉体的に敏感だった詩人を僕は知らないのである。

金色と青との秋の朝、僕はほとんど郷愁に近い思をもつて彼の詩集「形象篇」の事を考へる。形象は僕にとって「存在の靈」の放射である。

僕の留守中に友人の訪問があつた。最も親しい家族的な間柄の一人であるが故に大人

も子供も彼を玄関先では帰さなかつた。最近二年間の欧羅巴の旅から帰朝した其の友人は、僕の「聴きたがり」の家族につかまつて、又一くさり瑞西や仏蘭西や独乙で会つた吾々共通の外国の友達等の消息をおさらひさせられた。それから妻が其朝届いた「高山植物写真図聚」の第二輯を出して見せた。ちやうど「べにばないちご」の果実が現れた時、詩人でもあれば画家でもある其の大學生教授が、「ほう！」と云ひながら親指と食指とをして、モノクロオムの其の果実をつまんで口へ入れる真似をした。

「あら、いやあよ おぢちゃん！ 写真じやないの」と子供が云つた。皆笑つた。しかし

しかし僕は友人の此の行為を、單に子供を面白がらせる為のものだつたとは思はない。其処にはソヴィエットの生理学者バヴロフ教授の所謂「条件反射」の範疇に入れてよいやうな一つの現象が感じられる。

バヴロフの研究所にはすべての音響を遮断した厚い壁の密室があつて、其中に実験の材料が、即ち犬が幽閉されてゐる。人は巧妙な仕掛けで孤独の犬の前へ若干量の肉を出す。犬は動けなくされてゐる。彼は肉を見て唾液を分泌する。実験の目的は此の唾線の反射作用である。犬の頬の内部には吸角が取りつけてある。其中へ落ちる唾液の量と分泌の継続時間とが自記装置で記録される。一方、人は犬に肉を見せながら其間笛を吹く。これを継続してゐるうちに、犬にとつて、肉と笛の音と見る事との間に或聯想が出来上る。遂に笛の

音だけ聴いて唾液を分泌するといふ処まで進む。これがバヴロフの謂ふ「条件反射」である。そして本能の神秘だと思はれてゐた領域が此處で大いに狭められて來た。

僕の子供を喜ばせた友人ばかりでなく、僕自身、博士の「べにばないちご」の写真を見た時には或る甘酸ゆさを上顎の奥に感じる気がした。本物は知らなくても其の色沢や重みが分る気がした。多分それは半透明な、赤みを帯びた琥珀色の果実に違ひない。其の重みは果実の組織 자체の重みよりも、寧ろ一層多く、其処に満ちてゐる汁液全体の重味であつた。自然科学写真に於て科学的真を追及して、其処から芸術的美を抽出しようとする博士の努力の結実は、吾々の前に楽しい瞑想の舞台を開いて、過去の経験を生き生きと想起させるだけの力を持つてゐる。此際僕等が特に食辛抱な訳でもなく、又条件反射の機能を特に余計に持つてゐる訳でもない。博士の写真に追眞の勢があるのである。

それは器械がすぐれてゐるからだと云ふ人があるかも知れない。僕も半分はそれに同意する。しかし器械を駆使するのは人の技能である。目的物を選択し決定するのは識見であり、趣味である。マチスと同じ絵具を使つてもマチスの如くは描げず、ストラディヴァリウスのヴァイオリンを用ひても音楽の生徒に巨匠の如く弾けない事は極つてゐる。器械の力に過度な信用を置くのは危険である。殊に精密な或は強力な器械をして、人間の道義的世界に迄のさばらせるのは危険である。わけても器械が人間を投げし兼ねない今日！

携帯に便利な、なるべく網羅的な、併も一般向に通俗な、売行のよさそうな高山植物図鑑を出すといふ事は、今日、一つの事である。

携帯には恐らく便利でなくとも、一般向に通俗といふ事からは遠くても高山植物の生態の獨得の真と美との表現に重点を置いた写真図聚を出すといふ事は、今日、又別の一つの事である。

前者は主として出版者の希望するところであり、後者は著者の學者の良心の欲するところである。しかしこれが逆になると商人のやうな著述業者が出来上り、一方では見識のある、人格的な出版者と呼ばれる者が出現する。

僕は曾て何處かの席上で、近來自然科學者的一部の人達がその專攻する學問を一般社會に普及しようとするの余り、自然現象の説明に古今の文學に現れた叙述を結びつけて、其間不知不識の内に牽強附会を行ふ傾向のある事を指摘した記憶がある。

「學問があくまでも學問である」と云ふ事は、自然科学の場合で云へば、自然科学的真理の本質が、感覺的經驗から出発して、遂にはそれが概念の人間性脱離の境まで行くといふ事である。しかし斯うして抽象された真理の内容は、真理そのものの使命を果す上から再び人間性の中へ立戻つて来てあらゆる具象化へと進まなければならない。此の第二段の仕事にまでたづさはる学者こそ文化の促進に直接力をかす者である。

ところが此処まで来ると資本主義乃至ジャ

アナリズムなどの怪物が鉄腕をひろげてゐる。彼等は社会一般の自然科学への趣味の進出と自然科學的研究心の勃興との機運に巧みに乗じて學問の普及を一手に引受けようとする。彼等は科學者を動員する。真理の使徒が善良にも、単純にも、此の吸血鬼共の「犠牲的出版」の大旆の下で神聖な身震ひを感じる。もつと従順な、もつと少い費用で済む傭兵の大群は真理の使徒のアマチュアである。彼等は抜目が無くて便利である。其上彼等は學問の通俗化を、真理の歪曲を実に易々とやつてのけるといふ不思議な才能をもつてゐる。敬虔な大使途が「名前だけ貸してある」間に、銅貨臭いインチキ本が福音書の金文字押してどしどし大量生産される。かうして「通俗科學」といふ不可思議な言葉が白昼堂と通用する。

科學的真理を能く限り平易に説明して、一般人に真理内容の滋味を味識させ、進んでその研究への愛着心を起させることは科學者として最も好ましい態度である。しかし真理の平易化と通俗化とは飽くまでも峻別されなければならない。通俗化は方法を結果とする唾棄すべき迎合主義であり、真理の歪曲である。かうして「早対性原理早分り」の如きものが生れる。数年前アイシュタインの「万有引力場及び電磁場の統一場の理論」が公けにされた時、大衆への科学普及化に力を注いでゐる巴里の共産主義的週刊新聞「モンド」(アンリ・バルビュッス主宰)が、殆んど半頁に及ぶ紹介を書きながら、「これは非常に難解な理論だ」と告白した正直さを僕は氣持よく

思った事がある。

「高山植物写真図聚」の場合で、武田博士と出版者とがよく此の邪道に接近しなかつた事は、學問の為にも、又一般研究者及び愛好者の為にも多としなければならない。廉直な、氣骨稜々たる学者があつて、利得や名声のために真理を曲げず、學問を辱めない事は、今日のやうな時代にあつては一つの爽快事である。此事は又他の學者達を勇気づけ、鼓舞するだらう。一閃の日光はよく闇を照らす事が出来なくとも、その一筋の光は人に太陽のあら事を知らせるだらう。

今朝、七つになる僕の子供が寝床の上で着物を着換へながら、何を思ひ出したか、不意に、物にあこがれるやうな声で「あゝ、武田さんのお顔が見たいな」と云つた。

「どうして」と、満腔の興味に促されて僕は問ひ返さざるを得なかつた。「だつて、いゝお顔をしていろんな面白いお話を下さるんですもの」「さうだ」と僕は云つた。「さうだよ」ともう一度新らしい確信をもつて僕は云つた。僕は此の確信を声を大にして天下に叫んでもいいと思つてゐる。

僕にとつて自分で結ぶ我垣といふ物はない。僕は人も亦我と我垣を高くしない事を祈る。人は武田博士に或距離を隔てた敵意のやうなものを持てゐる。議刺の矢で傷けられる事を懼れてでもあるかのやうに。或は何かうしろ暗い事でもあつて、それを看破されま

いと氣を配つてでもゐる人のやうに。

膝と膝とを向け合つて、互の顔をまともに見ながら、人と人が常に明かに会ふ事が出来たならば！

常に人と人が、相手の食を補ひ合つたならば。喜んで我が足らざるを相手の富に満たさせる程、それ程ひろびろした心を持つて他人に向ふ事が出来たならば！

時には烈しい見解の相違から組打ちするやうな事さへ起つても、若しも其の動機が互の友情にあるならば、相手の怒を買つても尚彼の運命を我事のやうに気遣ふだけの友情にあるならば、それは彼等の愛を明日こそ一層強く強くる事に役立つであらう。

或日僕がつくづくと見る彼の顔に、何と静かに老が其の小波の数を加へてある事か！掛け馴れた眼鏡を外した彼の顔が、何と見なれぬ珍らしい、又幾らか子供らしいものに見える事か！厳めしい眼鏡を外した顔といふ物は、不用意な、武装解除の顔ではあるまい。

あゝ「在る」事の不思議さよ！人間の懷しさよ！

此瞬間、恐らく武田博士は、私の娘の「会ひたい」願にも拘らず、何処かの山を歩いてゐる。「木曽駒から白馬へ、それから長駆して八ヶ岳へ」といふ大掛りな予定ですがね」と博士はいつてゐた。

「薔薇ならば花咲くべし」栄子よ、「今度來たら君が代を歌つて上げますよ」と約束して山へ立つた武田さんは必ず帰つて来る！僕としては時々思ひ出して博士の書いた研

究や紀行文を読む。写真図聚の解説を読む。

「文は人なり」といふ言葉をやはり本當だと思ひながら。そして見識と「物」とに満ちた其の文章を愛しながら、僕は一層よく、こまく博士の人柄や心榮えに滲入し得る気がするのである。

〔霧の旅〕（昭和六年九月十五日）第十三年・三十七号／贈写版

秋の山地と懐しい人々

秋も深くなりまさつて、山々の自然はどんなだらうと想ふ。

あゝ、谷を埋め峯を飾るあらゆる闊葉樹の赤や黄の色。ちら／＼日射しのこぼれる山路の露のしめり。微かではありながら耳の底にしみとほる四十雀、小雀、山雀の糸のやうな澄んだ鳴り。透明に紅染した樹々の向ふに、麗らかな日光を浴びてよこたはる山腹や山頂の平和なすがた。それから秋はわけても美しい日本の山村。その窮状にもかゝはらず、尚且人をして襟を正さしめるやうな眞面目な、

きつぱりした、清廉な農家のたゞまひと其處に生きる人々。さうして此等すべての上にひろがる悠久な青空と、清澄な空気と、又其処を流れる豊かな、爽かな、冷たい水と……

日本の秋の山地をおもふ事は、すくなくとも私にとつては、我が國土の美の中での最も由緒ある、最も精神的な美をおもふ事である。或年の十月、私は奥多摩の支流大丹波川の谷間の秋をさぐりに行つた。もう毎日渡り鳥の来る季節で、御嶽駅からのバスを捨てゝだ

ん／＼大丹波の村の中心へ入つて行くと、いたる処小鳥の声が流れてゐた。東西直ちに山を控へ、北から南へ流れる渓谷をさしはさんだ此の美しい山村では、折柄薩摩芋の取入れの盛りであつた。畠はすべて山腹の斜面にあるので、村道を行きながら其の賑やかな有様が壁画のやうに眺められた。畠を掘返して行く男達、その後から芋を集め女達、すでに刈取穫を終つた畠をうなつてゐる者、平らに均らされた真黒な土の上に、網を引いて畦の筋をつけてゐる者、又その筋に従つて鋤を入れてゐる者、下から肥料を運ぶ者。それはすべて懸命な、平和な、賑やかな労働の一帯の絵画であつた。

私は此の光景を見とれるのだつた。私は此の人々の生活を羨ましくさへ思ふのだつた。時に邪道にすら陥る事の無いとは云はれない文学の仕事とくらべて、此の自然を相手の、此の集団的な仕事の、天に則つた強みと美とを腹の底から善しと思はずにはあられなかつた。

私はリユックサックから写真機を出して三脚を立てた。かういふ生活の力ある美しさを、どうか自分の家の者達にも見せたかつたから。彼等にも自分の斯うした感動が分けたかつたから。

私が黒布をかぶつて焦点硝子を覗いてゐると、肥桶をかついで之から上の畠へ行く一人の百姓が通り掛つて立止つた。其人は云つた。『写真ですか』『さうです。皆の働いてゐるのが余り美しいから写さうと思つてゐるんです』

『うまく写りますか』

私は微笑した。『さあ、うまく写る積りなんですが……まあちょっと覗いて御覧なさい。尤も逆さに見えるけれど、その積りで見れば何もかもよく分ります』

私は其人に場所をゆづつて写真機を覗かせ、うしろから其の胡麻塩頭へ黒布をかぶせてやつた。

『やあ！ 綺麗だなあ！』と、其人は歎声を上げた。『これは綺麗だ。あの日の当つてあるのがわしらの家です。柿の実が一つ／＼よくまあ写つてあるなあ。畠の衆もみんな入つてゐる。これはみんな見せたいもんだ』

私は幾らか得意だつた。それに此人の素朴な喜びが嬉しかつた。それで私は云つた。

『出来たら送りますよ』
『送つてくれますか、本当に。それは有難いな。待つてありますよ！』

私は手帳を出して其人の名を書いた。
『ぢやあ御免なさい』さう云つて彼は肥桶をかついで『畠の衆』のある方へ登つて行つた。私はすかさず、其の後姿を入れてシャツジャーを切つた。

其後私は出来た写真を約束通り彼に送つた。ほかの者にも分けたいだらうと思つたので、四枚ばかり余計に焼いて同封した。すると、田舎の人の正直さよ！ 彼は折返し葉書を呉れて、写真が無事に着いた事、家の者が大喜びで見た事、これは大切に取つて置く事、心に掛けた事、心に掛けた事は、あすこと一緒に写つてゐる誰彼にやつた事、さうして最後に、今度又大丹波の方へ来る事が

あつたらば、是非立寄つて一泊してくれと云ふ事などを、廻らぬ筆でこまゝと書いて寄越した。

私は私でまた、此の真情のこもつた一枚の葉書をこよない紀念として秘蔵してゐる。

又或年の秋、軽井沢から神津牧場、荒船山附近の秋色にあこがれて、今度は七人ばかりの一行為出掛けた。私にとつては曾遊の地、他の者には初めての場所だつた。上野を夜汽車で立つて、翌日は軽井沢の南の八風山から物見山へと上野・信濃の国境の山々を歩いて、神津牧場で一泊しようと云ふのが其時の予定であつた。

上州山地の紅葉は案の通り真盛りだつた。軽井沢あたり落葉松はすべて秋のレモン黄に染まつて、キクイタゞキや日雀の囁る高原の林の上には、雄大な浅間山が柔かな白い煙をのせて横はつてゐた。私達は一本の草、一枚の葉の末にいたるまで紅染したあの高原を、詩に満ち、若さに満ちて進んだ。

ところが、いよいよ八風山へ掛ると、天氣

が急に悪変して雨になつた。その雨は次第に強くなり、やがては風さへ吹きそつた。私達は何時あがるとも見えない風雨の中を、肌着まで濡れ通して国境の尾根を上下した。みんな寒さにあつて、雨宿りの場所の無いままに食事も出来ず、空腹をかゝへてひたすら神津牧場を目ざして泥濘の山道を辿るのだつた。やがて午後三時に近く辿り着いた神津牧場。そこでも亦不運が私達を待つてゐた。丁度秋の二日続きの休みだつたので、此処を目的に來た登山者が無慮三百人。事務所は元よ

り、牧夫の住居まですつかり明け渡しても、こんな多勢を泊らせる事は出来ず、宿泊を断られた人々は此の雨の中を二里向ふの初谷鉱泉へ行くか、道を戻つて軽井沢へ帰るかするより外に仕方がなかつた。

私達も其の仲間だつた。しかし幸、牧場の主任が私の顔見知りだつたので、牧場から半里ばかり下にある屋敷といふ小さい部落の区長へ宛てた、名刺の紹介状を貰ふ事が出来た。

私達は落胆した群衆と分れると、黄色く枯れて雨に濡れた牧場をうしろに、上州側の谷間をさしてとぼとぼと降りて行つた。其のうちに雨が小降りになり、雲が切れ、薄い青空さへ見えて、十月の山谷の眺めは、悲觀した私達の眼にも限りなく美しかつた。やがてとうしろの山の上の雲の切目から黄金のやうな夕日が洩れると、畠が現れ、赤や白のコスモスが現れ、目の下に藁屋根が現れて、其処が牧場下の最奥の部落、農家幾軒と数へる事の出来る屋敷であつた。

濡れしよばたれた私達が、牧場の主任からの紹介の名刺を出して一泊を乞ふと、其の区長の家では快く迎へて呉れた。主人は不在で、男達は皆畠や山へ出てゐたが、家に残つてゐる老人の主婦や、嫁や、三人の年頃の娘達が総出で、家中の囲炉裏に火をかん／＼起し、濡れた着物や靴下を紐で吊して乾かし、温かい飲物を作り、あらゆる心尽しの歓待を惜しまなかつた。やがて夜になると息子達や作男の連中がどやどや帰つて來た。此の人達が又女達に劣らず気持のいゝ、親切な人達だ

つた。私達もすつかり感奮して、持参の缶詰や食料を皆出してしまひ、此処の御馳走と一緒にした。まるで何かのお祝のやうな賑やかな晩餐だつた。其処の家族と私達の一一行と加へて十幾人といふ者が、まるで十年の知己のやうに話し、飲み、食べた。私の数多い経験の中でも、こんな楽しい山地の一夜は珍らしい……

こんな人々や自然を思ふにつけ、もう山はどんなに美しい秋に彩られてゐる事だらうと、心の躍るのを禁じ得ないのである。

「雄弁」(昭和九年十一月号)／原文繰り付き

旅に生きる

昨秋、信州の戸隠山から越後へ行き、妙高山の方へとさまよつた。実に美しく晴れ渡つた秋の妙高の山麓には黄色いカラマツ、ヌルデ、カシワ、ナラなどが青い大空の下で焰のやうに燃えてゐた。

この妙高の高原といふのは、東へ、すなはち野尻湖の方へすばらく立派な裾を引いてゐる。その裾を、妙高山を中心にして、深い谿谷がいくつも穿たれ、峡谷の両側には亦美しい紅葉が燃えてをつた。山麓を巡る道はすべて峡谷を横断し、一方には深い谷、一方には円錐形の妙高が男らしく聳えてゐる。かういふ自然の姿をながめると、幾日さまよつてもあきないものだ。殊に北の方には頸城平が金色にかすんで見え、そのずっと先には、日本海があるらしく、白いハガネ色

に光つてゐるし、又、むかふの山頂に野尻湖のキラキラとする光りが映えて全く言葉にいひつくせぬ自然であつた。

——この旅で拾つた二、三の思ひ出話を語つてみよう。

x

岡倉から燕温泉への道は妙高の秋のもつともすぐれた道すぢである。それは妙高の本山から東へのびた丸山の裾を巻いて安山川を貫いたトンネルを越して行く途中山ぶどうが真赤にうれ一面に崖からぶらさがつてゐる。それを食べながら、向ふに小さく見える温泉に着いてあたりの金色から紫に近い紅葉の姿を見た時には、全く心がひろがつてしまじみと漂泊の詩人といったやうな抒情を感じさせられる。

この燕温泉は神奈山の麓にあり、宿屋は六七軒、宿の窓から神奈山の紅葉が焰のやうに見える。

晩になると宿では帳場のゐるゝへ客をよんでも、山ぶどうで造つたお湯をのましてくれる。熱いお湯に少しばかり砂糖を入れてのむ。その味は、旅人にとって忘れ得ぬ山の味覚といへるだらう。

こゝは一年のうち一番美しい秋に客がなく、スキーの頃になつて漸く人が集まるといふのが何となく皮肉にきかれた。

x

旅で会ふ子供ほど、美しい記憶をたのしませてくれるものはない。

燕温泉から帰るには、東北に流れてゐる小田切川に沿つて関山の町に出、そこから汽車

でかへるわけであるが、このあたりは如何にも北国の秋の高原らしいさびしさと、力とを対象した美しい情緒をたくはへてゐた。

私は、その美しい自然に心を惹かれて、関

山の町近くから眺める妙高と妙高高原の写真をとつた。丁度学校の子供が帰る時刻で汽車の出るまでに時間がない。遠くの方では早や汽笛がきこえる忙しさだ。すると、私のその慌しげな様子を傍で見てゐた子供たちは、恰もわがことのやうに一生懸命で写真機の三脚を片づけたり、リュックサックをもつて走り出したりしてくれた。

おかげで、私は汽車に乗りおくれることもなく、やつとのことで発車間際にかけ込んだが、子供たちには有難うとお礼をいつたきり菓子一つやることも出来なかつた。

——こんな記憶は全く旅でなければ味はれぬ幸福な誰からも奪取されることのない美しい思い出である。

x

子供といへば、こんな思ひ出も残つてゐる。それは関東のある山地を歩いた時のこと、夕方になつて急いで山を下りてくる私のあとから、追ひすがるやうに一人の子供が従ってきた。勿論、大人の私の方がどうしても足が早い。

しかし後からくる子供もよほど頑張りやとみえて、小走りながらついてくる。さうして凡そ十町ばかりも歩いて、ふと私は立ちどまつて、暫くあたりの美しい景色に見とれてをつた。

と、後から追ひついてきた子供も、私の傍

に立ち止り、「いゝ景色だなあ」と如何にも感嘆したやうに、又さつきから競争心も忘れてしまつたかのやうに、話しかけるのであつた。

それからとうとう私たちは仲よしになり、いろいろな話をしながら、山を下りたのであるが、——私には楽しい思ひ出であつた。

×

私は旅に出ると、途中でなるべく多くの人と交渉をもつことにしてゐる。いろいろな人と交渉をもち、それが思ひ出になることが楽しいからである。特に、女人の人や、子供などは男からきくとれぬ地方色のつよい旅の味覚をあたへてくれるのがうれしい。

勿論、そこは私たち詩人の歩き方のとくなところであらうが、私は、さうして自分の写しとつた写真や、手帳に書きとめた気持と一緒に持つてかへり、自分の生活の体験と楽しみにするわけである。

じつさい人生といふものはいつまでも尽きぬ旅もあるけれど、又死ぬまで滞在だとも私は考へてゐる。われくの一生は無常の法則によつて、富めるにつけ貧しいにつけ、樂しこつけることに在るのでないだらうか。

つまりさういふ態度が、ハイキング、大きいくいへばわれくの生涯の道にとらるべき、生きてゐることが楽しく、特に私はそれを詩人の生き方とさへ考へるのだ。

全く、詩人とは、幸福と思はなかつたものから幸福を生む人間である。——旅で見た子供の頬に涙のこびりついたのを見て自分の少

年時代を思ふのも、それは幸福の一つだ。山家の女房が、病氣の子供を負ぶつて医者にかけつけるのに出会い、どうしたと訊いてやることが子供の病氣には何の役にも立たなくて、それを訊かれたおかみさんにはどんなに大きな心の重荷を軽くしてやることになるか、又、そんなおかみさんに行き会つたといふだけで、旅する心がどんなに深い記憶でつかめられるか！

さういふ思ひ出をもつて生きること——それは真に富よりも美しい、高い、尊い体験のよろこびではないか人生はたくさんな思ひ出をかさねて、いひかへればいくつもの旅をかさねて生きることこそ、楽しいと云へるだらう。

——私は日本の文学者ほど旅をしないものはないことに驚くと共に、又私自身はかうして体験のひろさと深さに生きてゆきたいと考へてゐる。

尾崎喜八 録音記録(放送番組)

堀 隆雄

(以上四篇の原文の漢字はすべて旧字体)

昭36・7・13、NHK納涼特集『夏の夜の思いで』

38 7・16、NHK『星へのいざない』

7・8、同(1)

7・14、夫と妻の記録

40・7・26、NHK この人この道(串田氏と対談)

41・1・6、NHK みんなの茶の間『私の孫』

1・10、NHK 私の健康

2・20、NHK 自然と共に『知多半島のいっかく』

3・16、日本放送 青年への期待

3・18、木島則夫モーニングショー『高村光太郎智恵子展』

42・3・26、NHK 自然と共に『春告げ』

4・29、NHK特集番組『緑のメールヘン』

『花と小鳥と笛』

5・28、NHK-TV『智恵子抄』

43・6・19、NHK音樂夜話『私の尊敬する音楽家ショット』

45・10・15、NHK-TV『高原の詩』

3・23、NHK教育TV通信講座『音楽と私』

語『詩のこころ』

8・3、NHK教育TV通信講座『現代国語『永訣の朝』』

46・5・27、FM東海 バロック音樂と共に放送日不明 (服部幸三氏と対談)

手持ちの録音テープは以上二十二本です。これ以外の物をお持ちの方がありましたらご連絡下さい。コピーを採らせていただければ幸いです。又、日記等でこんな放送もあつたという記録をお持ちの方もご連絡をお願いします。住所・名古屋市名東区極楽寺一三五-三〇三

新聞・雑誌掲載目録(二)

- 大正一三年—昭和六年
- *印は未確認、調査中
- 大正一三年
- △詩▼
- 「よろこばしい冬——靄・冬の樹林・
董・霜と頬白・一つの望み・蛇窓に
別れる・クリスマス」 日本詩人 1 · 5
- 「月——落葉・眠られぬ夜のために・
風・La nuit d'etoile」 日本詩人 2
- 「銘酒花露の披露」 読売新聞 2 · 26
- 「生活二篇——ひとり者の最後の春・
想ふこと」 日本詩人 3
- 「ヨーロープに寄す」 日本詩人 4
- 「私の古い長靴」 雄弁 4
- 「我家遠望」 向日葵 5
- 「春の詩四つ——朝の我家・眼・麦畠
の落日・午前の歌」 婦人公論 5
- 「都の父母に」 少年俱楽部 5
- 「生活のよろこび——初夏の昼・輝や
く昼過」 婦人之友 6
- 「高層雲の下」 向日葵 6
- 「私の窓の南方の麦畠で・私は朝鮮の
歌つてゐるのを聞く」 日本詩人 7
- 「柏谷の茶店・ランプが微かな音をた
てゝ・私は承認を要求しない・梅雨
の野川」 向日葵 7
- 「彫刻・小鳥・平野の雲」 日本詩人 8
- 「小川の水浴」 向日葵 8
- 大正一四年
- △詩▼
- 「もず・鍵を持つ男」 少年俱楽部 10
- 「休息」 日本詩人 11
- 「十一月」 少年俱楽部 11
- 「秋の招待」 東京朝日新聞 11 · 3
- 「曳船の舵手」 向日葵 11 · 12 合
- 「老教授」 樹鶴 12 *
- 「樹下の小屋にて」 東京朝日新聞
5 · 20 ~ 21
- 「仕事と友情」 雄弁 6
- 「ヴァルハアランの『田舎の対話』」
向日葵 7
- 「画家ミレーの少年時代」 少年俱樂
部 7
- 「武藏野の夏」 婦人之友 8
- 「ベートーフェンの少年時代」 少年
俱楽部 8
- 「自然の中」 雄弁 9
- 「狄嶺氏を送る」 東京朝日新聞 9 ·
- 30 「自然」 少年俱楽部 12
- 「日本の自然と少女」 少女俱楽部 12
- 大正一五年
- △詩▼
- 「故郷にて」 抒情詩 7
- 「初夏の村」 少年俱楽部 7
- 「朝の花屋」 詩と版画 9
- 「屠牛」 抒情詩 9 *
- 「忠実な少年」 少年俱楽部 10
- 「守られた約束」 少女俱楽部 10
- 「愉快な兵卒」 キング 12
- 「自然」 少年俱楽部 12
- 「日本の自然と少女」 少女俱楽部 12
- △評論▼
- 「震災詩集『災禍の上に』警見」 日
本詩人 1
- 「詩人の印象・千家元暦——『感じ』」
- 「表現者」 日本詩人 7
- 「爽かな空」 の著者に就て」 日本
詩人 11
- 「詩——荷車の挽子」 (ヴェルハアラ
ン) 向日葵 11 · 12 合
- 「島崎さんの為に」 日本詩人 6
- 「大正十四年度作品批評(アンケート)」
日本詩人 12
- △翻訳▼
- 「詩——フランスの花売り」 (クロード
オジエ編『仏蘭西小学校の唱歌教材』
より) 少女俱楽部 4
- 「詩——歡喜・寛仁・村」 (エミール・
ヴェルハアラン) 抒情詩 5
- 「詩——森林」 (エミール・ヴェルハア
ラン) 純文学 10
- 「日記」 純文学 9
- 「日記収録其他」 純文学 10
- 「本気であれ——第七日本詩集を読んで」
都新聞 5 · 24, 26
- 「陶山篤太郎論(現代詩人小論一)」
日本詩人 5
- 「島崎さんの為に」 日本詩人 6
- 「大正十四年度作品批評(アンケート)」
日本詩人 12
- △評論▼
- 「私のかはゆい白頭巾」 日本詩人 1
- 「Loiseau bleu (偶作)」 築地小劇場
2
- 「風景画家・三月に」 抒情詩 4
- 「挽歌」 (亡き友・画家木村泰雄
に) 日本詩人 5
- 「希望・友・友を待つ・靈感」 生命 5
- 「山」 現代 5
- 「桜桃」 雄弁 5
- 「日本の朝」 少年俱楽部 5
- 「エネルギイ」 明星 5 · 6 合
- 「土曜日の夜の帰宅」 日本詩人 6
- 「友情の詩二篇——或朝のおもひ・慰

藉」 生命7
「熱狂」 詩歌時代7
「熱狂」 日本詩人8
「やがて寒さが」 読売新聞8・30
「草に・東京の秋」 日本詩人10
「若い日本」 キング10
「バッハ的な夕暮・西北風」 日本詩人11
「世界の詩人に——ルネ・アルコスに」
近代風景12
「高井戸にて」 太平洋詩人12
「勇ましい小学校(童話詩・雑記)」
「幼年俱楽部(童話詩)」 幼年俱楽部4
「ロマン・ロランの友等に」 都新聞
「散文二つ」 不二7
「夏の武藏野で」 現代7
「或る会合」 都新聞10・26、27
「やはり野に置け」 太平洋詩人6
7合
「ある思ひ出」 少年俱楽部6
「ここる」 都新聞6・5
「夜——マルセル・マルチネに・林を
ぬけて・追憶——故木村泰雄に・武
州鳥山——中西悟堂に・ブランデン
ブルク司伴樂」 待望(尾崎喜八個
人誌) 1
「私の詩」 若草1
「日本の歌」 キング1
「或る銃獵家の獲物を見て」 太平洋
詩人2
日本詩人1
「ヴェルハアラン——高村光太郎君に
此の小論文を捧げる」 明星3
「詩集『夏草』を読んで」 都新聞8
22、23
「進みゆく少數者の為に」 都新聞9
20、21

「詩壇からみた文壇」 近代風景11
「大正十五年の作と人(アンケート)」
「所有的歌から」 炬火8
「踏み止まる一群の者(ルネ・アルコ
スに)」 バリケード9
「我兒——その児の母に」 現代文芸9
「新学期」 少年世界9
「麦畑での無言の返事」 詩文学10
「東京の秋(現代詩人選集)」 若草10
「生けるロマン・ロラン」(同)生命7
「昔の大家の楽譜に現代人が附加した
楽器」(エクトル・ベルリオ) 交
響楽7
「詩——光明の最初の日」(マルセル・
マルチネ) 太平洋詩人12
「詩——光明の最初の日」(マルセル・
マルチネ) 太平洋詩人12
「幼きもの」 都新聞5・1~5
「兄弟の愛」 少年俱楽部6
「所有の歌から」 詩集11 ※2
「母性」 詩集12
「夜——マルセル・マルチネに・林を
ぬけて・追憶——故木村泰雄に・武
州鳥山——中西悟堂に・ブランデン
ブルク司伴樂」 待望(尾崎喜八個
人誌) 1
「言葉の純粹音樂(アンケート・余は
かく詩を讀む)」 植の木5
「詩人ヴァルドラック」平原10※3
「デュアルメルの一訳者として」 バリ
ケード10
「詩話会解散後一年」都新聞10・14、15
「推薦書(美術)」都新聞12・23
「上演したい戯曲」都新聞12・29
「野性」詩集2
「日本的眼」炬火2
「早春の歌—妻に・幼い眼」生活者2
「美しいこの世」少女俱楽部3
「所有的歌(旧作)」詩集4
「都会の黎明の雲に・義妹に」 東方

「詩集『ウーロップ』から」(ジュー
ル・ロマン) 銅鑼9
「故郷」(デューアメル) 現代文芸9
「四つの譜詩」から——フロランタ
ン・ブリュニエの譜詩・喉に負傷し
た男の譜詩」(デューアメル) バリ
ケード10
「詩——昔・私はくゆらす事を好んだ。
それは五月の或る朝だつた」(デュ
アメル) 詩集11
「接待と晩餐」(レオン・ヴェルト)
詩神12
「良識の人(川路柳虹の印象)」炬火
5
「詩」詩集
「中野秀人の首」詩集1
「委嘱——武藏野に与ふ——(現代日
本詩人号)」詩神1
「十一月(現代詩人自選号)」民謡
詩人1
「野性」詩集2
「日本的眼」炬火2
「早春の歌—妻に・幼い眼」生活者2
「美しいこの世」少女俱楽部3
「所有的歌(旧作)」詩集4
「都会の黎明の雲に・義妹に」 東方

「詩集『ジアン・ド・サンブリ』」 太平
洋詩人2
「楽しみと遊び」(ジューアメル) 生
活者5
「樂しみと遊び」(ジューアメル) 生
活者6
「詩集『ウーロップ』から」(ジュー
ル・ロマン) 銅鑼9
「故郷」(デューアメル) 現代文芸9
「四つの譜詩」から——フロランタ
ン・ブリュニエの譜詩・喉に負傷し
た男の譜詩」(デューアメル) バリ
ケード10
「詩——昔・私はくゆらす事を好んだ。
それは五月の或る朝だつた」(デュ
アメル) 詩集11
「接待と晩餐」(レオン・ヴェルト)
詩神12
「良識の人(川路柳虹の印象)」炬火
5
「詩」詩集
「中野秀人の首」詩集1
「委嘱——武藏野に与ふ——(現代日
本詩人号)」詩神1
「十一月(現代詩人自選号)」民謡
詩人1
「野性」詩集2
「日本的眼」炬火2
「早春の歌—妻に・幼い眼」生活者2
「美しいこの世」少女俱楽部3
「所有的歌(旧作)」詩集4
「都会の黎明の雲に・義妹に」 東方

5 (創刊号)

「ヘルマン・ヘッセを読む夕暮・初夏・
龍胆色」 東方 6

「ヘルマン・ヘッセに」 詩神 6

「朽ちる我家・夏野」 東方 7

「開墾地にて」 キング 7

「第二の所有の歌」から「近代風景」8

「ヘルマン・ヘッセを読む夕暮」(現代
詩人自選詩) 読売新聞 8・22

「星空の下を・船長・朝の速記・国土
の人に」 東方 9

「夏から秋へ」 現代 9

「初秋の武藏野風景」 東方 10

「海で――星空の下を・船長・朝の速
記」 詩神 10

「限界」 東方 11

「秋」 詩集 12

「農夫の歌」 現代 12

「新アスレチック・ロマン ロランか
らの消息」 東方 5

「初夏の日に」 都新聞 5・10~13

「病めるマルチネ」 東方 6

「新アスレチック」 東方 7

「雷雨の前(芸術写真に添えて)」 キ
ング 8

「私事雑記――京都、土佐行き」 東方 9

「冬木立」 雄弁 12

△評論▼ 「少年詩・選評」少年俱楽部 1~4・2

「或る仏蘭西の詩人等(世界詩壇の現
状)」 詩神 3

「敬愛の言葉(金子光晴特集)」 詩集 3

「古い友に(陶山篤太郎特集)」 詩集 7

方 10

「ロマン・ロラン訪問記」(ルシエン・
ライス) 東方 11 ※4

昭和四年

△詩▼

「詩――冬の歌(ヴィルドラック)・
熱狂(ヴェルハーラン)」 詩集 1

「詩――白い大鳥(ヴィルドラック)」
詩集 3

「詩――河・村落・丘陵」(マルチネ)
銅鑼 3

「詩――森・牢獄の中庭を通る懐妊の
娘(牢獄の詩)から」(エルノスト
トルラ) 詩集 5

「詩――一九一八・一一・一 月曜
日」(マルチネ) 銅鑼 5

「詩――春のイマージュ・桃・光・解
・花・夕暮・宇宙・草の影・空(片
山敏彦、尾崎喜八、上田秋夫に)」
(マルチネ) 東方 6

ク) 詩集 6

「日本の旅」から(ヴィルドラッ
ク) 詩集 6

「ファン・ゴッホ」(レオン・ウエル
ト) 銅鑼 6

「獅子座流星群」の序(ロラン) 東
方 7

「ファン・ゴッホ」(レオン・ウエル
ト) 銅鑼 6

「散文詩――キヨエ・ビスベルクにて」
(ヴェルハーラン) 詩集 7

「生きる」(ヴィル・ド・ラック) 東方 8

「詩――自由・星(最近世界文学選一
九二八フランス篇)」(マルチネ) 若
草 8

「詩――真夜中に」(マルチネ) 単騎

「詩――砂漠」抄(ジュウヴ) 東

俱楽部 1

「子供の朝」 現代 4

「祝辞」音楽雑誌「イルハーモニー」4

「春の夕暮から夜へ(片山敏彦に)」
詩集 5

「音楽を聴く詩人の断片」 音楽雑誌
「フィルハーモニー」6・20~22

「奥上州の旅から」都新聞 6・20~22
「弔文・哀悼(井上英子夫人追悼)」
詩集 6

「非凡の力は高原より(附写真)」 キ
ング 3

「けなげなりュセット(童話詩)」 幼
年俱楽部 10

「春の試み」から 詩集 4

「春の試みから――山麓の町から・い
ぬのふぐり」 詩集 5

「初夏の山(尾竹国親筆)」 富士 5

「山間の歌」 現代 6

「朝の山(川北霞峰筆)」 富士 6

集 7

「旅二篇――赤城展望・旅の友」 詩
集 7

「友情讃歌」 雄弁 7

「健康」 キング 7

「夜の大都会(附写真)」 富士 7

「月の宵(田中頬璋筆)」 富士 8

「星空の歌」 少年俱楽部 9

「無為の日の獣王(附写真)」 富士 9

「來るべき詩の為に(都新聞 1・28~31
「レオン・バザルジエットの訃」 読
売新聞 2・13、14、16

「冬花帖」と其境地」 現代詩評 3

「新刊詩書紹介」 現代詩評 4

「Quantum mutus ab illo!」 詩神 5

△翻訳▼

「詩――今度の時には」(ヴィルドラ
ック) 詩集 1

「詩――焰と光」(デュアメル) 潤
葉樹 1

「訳詩三抄(仏蘭西篇)――地中海
(マルチネ)・或る死者に(ヴィル
ド・ラック)・私は現代の悲惨を(ジ
ュウル・ロマン)」 詩神 2

「詩――少女が家にゐて歌ふ」(ヘ
ンゼ) 学校 2

「詩――会見」(ニアメル) 潤葉樹 2

「詩――旅・もしも落胆した冬が」
(ニアメル) 潤葉樹 3

- 「楽しみと遊び」(デュアメル) 文
芸レピュード3
- 「詩——ワロンの村々・踊りまはる風
は・秋」(イヴォンヌ・エルマン・
ジルソン) 潤葉樹4
- 「詩——コモの湖水の四羽の家鴨・ア
ノオル」(ジュウル・ロマン) 潤
葉樹6
- 「詩——庭」(ヴィルドラック) 潤
葉樹6
- 「抒情生活への序論」(デュアメル)
詩集8
- 「詩——まだ夕暮に」(ジュール・ロ
マン) 詩集11
- 昭和五年
- ▲詩▼
- 「その顔」 詩集1
- 「床しき世界・若駒」(附口絵) キ
ング1
- 「言葉——五才の菓子に」 南方詩人
- 「離祭」(附写真) 富士3
- 「あちらのお友だち」(附写真) 富士4
- 「歩く者の歌」 現代6
- 「千古の処女峰」(附写真) キング7
- 「夏雲の下を」(附写真) 富士7
- 「夏休みを待ちながら」少年俱楽部8
- 「初秋」 令女界9
- 「獸王無聊」(附写真) 富士9
- 「母の愛」 富士10
- 「初秋午前十六ミリ」週刊朝日10・1
- 「シーコーフィア」 詩洋11
- 「晚秋」 婦人俱楽部11
- 「山旅の朝」 詩文学12

- 「天才偉人の頌」 現代12
「ふるさと」(附写真) 富士13
- ▲隨想・物語▼
- 「子供と音楽」 音楽雑誌フィルハ
モニ11
- 「新年の御岳、大岳」報知新聞1・14
18※5
- 「子供と音楽」 音楽雑誌フィルハ
モニ12
- 「緑色の服」 音楽雑誌フィルハモ
ニ14
- 「一本の針」(童話詩) 幼年俱楽部5
- 「今日の雄弁家」 雄弁6
- 「ブランデンブルク・コンチャルト」
音楽雑誌フィルハモニ7
- 「山へ行くまで」 詩文学8
- 「秋の大菩薩峠」 都新聞9・19
植物採集会 報知新聞10・1(3) 21
- 「敬愛の言葉」 南方詩人1
- 「生田春月」 詩文学3
- 「文芸家思想家はどう音楽を観るか」
音楽世界3
- 「ロマン・ロランの近業」 都新聞
3・25~27
- 「最近読んだ書物について」 世界文
学評論12*
- ▲翻訳▼
- 「蜂群」(デュアメル) 詩集1
- 「ストラヴィinsky」とニジンスキ
ー」(レオン・ウェルト) 音楽雑
誌フィルハモニ6
- 「深夜の小屋で」 都新聞8・24
- 「神津牧場の淡彩的ノート」 アルビ
ニズム

- 「未来の生活の諸場面」(デオルジュー
デュアメル) 世界文学評論10*
- 「モーミング・ペッス」(ジャヴェル)
霧の旅11(№35)
- 「新年の御岳、大岳」報知新聞1・14
昭和六年
- ▲詩▼
- 「新春の山村にて」 現代1
- 「天地黎明」(附口絵) キング1
- 「偶成」 都新聞1・6
- 「君達は帰つてくる——猪狩夫妻に」
詩集2
- 「その名」 詩神2
- 「子供と大地」 キング2
- 「シーコーフィア」アルピニズム3
- 「奥上州詩抄——旅の友 前橋市遠望」
霧の旅5(№36)
- 「夏野のトラジック」 若草7
- 「詩三篇」——八ヶ岳裾野(茅野口)・
八ヶ岳裾野(茅野口)・一年後
霧の旅9(№37)
- 「夫の歌へる」 キング9
- 「晚秋の雲雀ヶ岡」(附写真) キング10
- 「言葉・北方の天」 詩人時代11
- 「秋の朝」 愛誦12*
- 「雪の林で」 婦人画報12
- ▲隨想・物語▼
- 「歩く者の歌」 現代6
- 「千古の処女峰」(附写真) キング7
- 「夏雲の下を」(附写真) 富士7
- 「夏休みを待ちながら」少年俱楽部8
- 「初秋」 令女界9
- 「獸王無聊」(附写真) 富士9
- 「母の愛」 富士10
- 「初秋午前十六ミリ」週刊朝日10・1
- 「シーコーフィア」 詩洋11
- 「晚秋」 婦人俱楽部11
- 「山旅の朝」 詩文学12

- 「山あるき」 都新聞9・20
「其頃を語る」 詩人時代11
- ▲評論▼
- 「読者文芸・詩選評」若草1~12
「新たに選者として」 若草1~11
- 「自由詩型の詩と作曲の問題」 音楽
世界4
- 「高山植物写真図聚——武田博士の
著」 東京日日新聞6・22
- 「高山植物写真図聚——武田博士の仕
事と人」と 霧の旅9(№37)
- ▲翻訳▼
- 「詩——地中海」(マルチネ) 詩洋2*
- 「ブラン・スリジエの葡萄小屋」(ジ
ヤヴェル) 山と溪谷5
- 「二夏の思ひ出」(ダン・デュ・ミデ
イ) (ジャヴェル) 山小屋12
- 「詩——地中海」(マルチネ) 詩洋2*
- 「ブラン・スリジエの葡萄小屋」(ジ
ヤヴェル) 山と溪谷5
- 「二夏の思ひ出」(ダン・デュ・ミデ
イ) (ジャヴェル) 山小屋12
- 目録(2)は、尾崎が関東大震災を契機
に、水野実子と新婚生活を始めた武藏
野高井戸時代から、やがて昭和に入り、
父の没後、市内新川(京橋区四日市町)
の実家に転居した時期に当っている。
そして、この間に於ける尾崎の活動は、
おそらく他のどの時期にも増して、多
様かつ旺盛であったことを窺わせる。
尾崎自身の略年譜(詩文集『花咲ける
孤独』)から洩れているものを二、三
挙げてみたい。
- 一つには、ヨーロッパの詩の翻訳に
熱心であつたこと。中でもヴェルハア
ラン、ロマン・ロランの仲間達——ヴ
ラム、ロマン・ロランの仲間達——ヴ

イルド・ラック、デュア・メル、アルコス、

マルチネ等——が多く、後年親近の度を深めたヘルマン・ヘッセも手がけて

いる。その成果の一につて、「ヴィルド・ラック選詩集」が一本になり、好評であった。又、彼等の紹介と共に吾国の

詩壇に対しての論評も多い。因みに、尾崎は当時の評論隨筆家協会会員であつた。

次に、これまで有力な発表の場であつた「白樺」「日本詩人」が消えてから、新時代の波のアナーキスト、プロレタリア系詩誌にも寄稿していることである。そして、「銅鑼」「学校」は後

の「歴程」と共に、草野心平と尾崎との長い交友を記録する。

この期の尾崎の文学活動に於て特筆すべきことは、個人誌「待望」(昭和二年一月号のみ)やロランの友人の会を中心とする友人達と協同して「大街道」、「東方」を刊行したことであらう。「大街道」は、大正十三年九月に、高村光太郎、高橋元吉、尾崎、高田博厚、片山敏彦、田内静三、吉田泰司等によって創刊された(現物及び編集発行人未確認、三号まで?)。「東方」は昭和三年五月から同年十二月まで八号で終わったが、田内を除く旧大街道の同人に上田秋夫、宮本正清、今井武夫が加わり、木村太郎、更科源蔵、真壁仁も寄稿した。そして、尾崎が編輯発行人になっている。「東方」「待望」は合冊で複製版が出ている(冬至書房新社購入可。国立国会図書館、

日本近代文学館所蔵)。尚、「東方」について百田宗治は、「『東方』の運動を得てはじめて『人生派』の詩が日本に

も興つたといふやうな気がする」(昭和三年詩壇警見——文章俱楽部3・12)

と評している。

文芸誌の他に、音楽誌にも音楽につわる隨想や評論を発表する(資料創刊号にその大部分が紹介されている)。

やがて次期の主力となる山の詩文と翻訳も現われてくる。

この期に於て、商業総合誌、新聞等の掲載が増加し、一般婦人向けから少年児童向けまでに及んでいる。そこに

は写真に寄せた詩もあるが、たとい少年向けの詩であっても尾崎特有的格調を保っていることを蛇足ながら記しておきたい。

尚、資料収集に當つて新たに、講談社、国立音楽大学図書館、日本山岳会図書室に御協力を得た。

註

※1 童話としてもよかつたが、行分けになつておらず、物語詩という言葉があるので用いた。

※2 井上康文主宰。友人として尾崎の他、金子光晴、陶山篤太郎、中西悟堂、勝承夫が参加した。

※3 尾崎と片山敏彦の二人誌。「詩集」に創刊広告あり、未確認。

※4 プライスから片山敏彦に送られてきたが、高村光太郎、尾崎にも宛てている。

※5 「山の繪本」(S 10・7刊本、

日本近代文学館所蔵)。尚、「東方」に

『詩文集』共)所載の同題文の附

記によると、尾崎が初めて書いた

山の紀行文で、「都新聞」に掲載

されたとなつてある。

目録・補遺
「ある夜」(小説) 我等大 8・4・15

「詩に就て(或る講演の草稿)」
日本勧業銀行月報大 11・7

「日記の断片(一)」 日本勧業銀行月報
大 11・10

「日記の断片(二)」〃〃 大 11・11

「第七シンフォニーの批判的研究」
(ペルリオーデ) ラ・ミュジカ大 12

「無為の時」(詩) 詩と版画大 12・3*

〔詩人が云つた〕 日本勧業銀行
月報大 12・4

「村路」(詩) 日本詩人大 12・6

〔詩人が云つた〕 日本勧業銀行
月報大 12・4

「富士見時代行動年譜」富士見尾崎会
の富士見時代行動年譜 II 富士見尾崎会
の諸氏、島正孝、石川翠。昭和初期尾
崎撮影の写真復元整理 II 星修。『喜八
資料』毎号の校正 II 西尚子。(敬称略)

★『尾崎喜八資料』の第二号をお届けいたしました。創刊号はタイプ印刷でした

が、今回からは思い切つて活版にいたしました。一詩人の研究誌としては

感じますが、研究会会員が三百二十名

になつたこと、また会員の間から喜八

の未刊行資料をもつと読みたいとい

う願望が多く寄せられたことを見なが

ら、こうした形をとりました。

★また、かつて月刊アルプで連載さ

れた田中清光氏の労作『山と詩人』が文京書房から刊行されました。明治以降の詩人と山岳の関係を追った大作です。是非御一読下さい。

★ 尾崎喜八研究会の郵便振替口座が開設されました。今年度からの払込は次の口座にお願いいたします。

横浜 7-33012 尾崎喜八研究会

★ 今回巻頭にニッセイを頂戴いたしました山崎榮治さんは、詩人として早くから喜八をご存知の方です。『山崎榮治詩集』(沖縄舎刊)で、昭和五十七年度読売文学賞を受けられました。

★ 嘉納、勝畠、堀氏は創刊号でご紹

介いたしましたが、その外に、それぞれテーマをもつて研究に協力されてい

る方々をここにご紹介します。

校歌 II 名取正義(富士見在住)。尾崎

の富士見時代行動年譜 II 富士見尾崎会

の諸氏、島正孝、石川翠。昭和初期尾

崎撮影の写真復元整理 II 星修。『喜八

資料』毎号の校正 II 西尚子。(敬称略)

★ 今回、初の試みとして、初期の山

行きのエッセイを中心と資料を掲載し

ましたが、いかがでしょうか? ロマ

ン・ロランからマルセル・マルチネ、

ヘッセまで海外の文学者たちと関連し

た文章、自然観察と写真についての文

章など、こうした形でまとめて載せら

れるテーマは多々ありますので、研究者の方々とはかつていければ、と考えております。

(石黒敦彦記)

この一年のできごと

郷土館オープン。尾崎の信濃追分に関する作品・写真を主としてその他の著書・資料の展示コーナーが設けられている。

二月二日、毎年生前親交のあった方々によつて行われている蠟梅忌第十一回が、東京青山の青山荘で行われた。挨拶＝串田孫一氏、お話を「尾崎喜八の詩への思い」田中清光氏（詩人）、「尾崎喜八と農村青年との交流」名取正人氏（富士見、農業）、チエロ・ブロックフレーテ演奏、尾崎喜八TV出演の録画映写等の催しがあつた。司会者伊藤海彦氏から「尾崎喜八研究会」発足の披露があり、全員会員となり機関誌『尾崎喜八資料』が手渡された。出席者八十名。

四月二十八日、長野県南安曇郡穂高町、町立穂高中学校校庭に同校同窓会の手で「田舎のモーツアルト」の詩碑建立、除幕式。尾崎

喜八の筆書きの色紙から拡大したものを鋳金家宮田宏平氏に依頼してレリーフが作られ、中房川から採取した花崗岩にはめこまれたもの。安曇野穂山美術館の隣。除幕式参列者百名を越す。

六月五日付東京新聞・南信日日新聞、六月十三日付朝日新聞・毎日新聞、八月二十三日付信濃毎日新聞、月刊「岳人」に尾崎喜八研究会が発足し機関誌が創刊された旨の記事が載り、それによつて全国各地から読者の方々が研究会の趣旨に賛同、入会の申込をされた。

七月十四日、長野県軽井沢町追分に追分宿

森で碑前の集い第六回開催。挨拶＝中山政市氏（富士見尾崎会代表）、お話を林憲一郎氏（京大教授）・樋口治久氏（富士見、製材業）。尾崎の放送録音の一部を聞く。その後引きづいて希望者は入笠会館にて懇親会。参加者約八十名。

三月に、昭和七～十二年頃の尾崎撮影の手札型乾板約六百枚程を預け先立川市尾崎玄三氏宅より引き取り、復元作業を始める。その約六割には克明なデーター記入あり。十月十八日読売新聞夕刊・十一月十七日号週刊読売に写真とともに紹介記事掲載される。

十一月一日、鎌倉文学館オープン。自筆原稿・色紙・著書・身の廻りの品々を寄贈。常設展示コーナーあり。

詩碑・文学碑の案内

「いたるところの歌」「晩き木の実」詩文集「冬の雅歌」以上十巻、各巻二五〇〇円。書簡集「名もなき季節」（一〇〇〇円）。弥生書房＝東京都新宿区中町一八『ジャム詩集』（八〇〇円）。六興出版＝東京都文京区水道二一九一『わが音楽の風景』（二一〇円）。鳥影社＝諏訪市大手二一一一六『自註富士見高原詩集』（二八〇〇円）。中央公論社中公文庫＝日本の詩歌17巻（六八〇円）。

現在刊行中の尾崎喜八著書・訳書

創文社＝東京都千代田区一番町一七一三『尾崎喜八詩文集』（詩集「空と樹木」「旅と滞在」「花咲ける孤独」散文集「山の絵本」「雲と草原」「美しき視野」「夕映えに立ちて」

書誌年譜整備にあたり、手に入りにくい古い雑誌や、思いもかけぬ小冊子掲載のコピー又は情報をお送り下さった方、不明で困惑していた点に光明を与える情報を寄せて下さった多数の方々、一々お名前を列記できませんが各担当者一同厚くお礼申し上げます。

尾崎喜八資料・第二号
一九八六年二月一日発行・非売品
発行・尾崎喜八研究会
鎌倉市山之内一九七一五一（²⁴⁷）
電話〇四六七（二三）一七六一
（尾崎栄子 記）

尾崎喜八資料・第二号
一九八六年二月一日発行・非売品
発行・尾崎喜八研究会
鎌倉市山之内一九七一五一（²⁴⁷）
電話〇四六七（二三）一七六一
（尾崎栄子 記）